



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

（第二一八号）

小寒 しょうかん
一月六日

芭蕉の弟子、各務支考

新年あけましておめでとうございます。

新たな年を寿ぎ、新年会をはじめ、お茶の初釜や俳句の初句会なども催される頃かと思えます。

江戸時代の俳人、松尾芭蕉は三重県伊賀上野出身ですが、その弟子の一人が伊勢に草庵そうあんを結び、芭蕉の俳句「蕉風」しょうふうを広めていたことを知りました。弟子は各務支考かみしこうといえます。

支考は寛文五年（一六六五）岐阜県美濃の生まれで、芭蕉晩年の元禄三年（一六九〇）に師事し、「蕉風」の代表的な門人十人の「蕉門十哲」しょうもんじゅうてつの一人に数えられたほど。とくに芭蕉没後翌年にはその足跡を訪ね歩き、芭蕉の句を集めて『笈日記』おひにじという書物にまとめました。芭蕉と「蕉風」を世に広く知らしめたのは、この支考の功績が大きいと言われています。

研究者によれば、支考が芭蕉の意向を受けて伊勢へ来たのは、元禄七年（一六九四）春から初夏頃。その年の秋に詠んだ句に、草庵の地を探していたら二見浦で十五夜の名月と出会ったというものがあります。

二見まで庵地たづぬる月見かな

支考

その月を師の芭蕉は伊賀上野で見ましたが、芭蕉は支考に力添えするため、自らも秋から冬にかけて伊勢参拝を計画したようですが、残念ながらその年の十月に没してしまいました。けれど、支考は伊勢在住の俳人、岩田涼菟りょうとや中川乙由おつゆと交流し、伊勢蕉風を確立させるのです。

むめ（梅）が香の筋に立ち寄る初日かな

支考

新年の寒さの中にも、清らかな梅の香が通る道筋。そこに初日が射し込んでくる。なんともすがすがしい一句です。

文 千種清美

